

いのが判らない。

思想の偉大な原動力、アナキズムは、今日、人間活動のあらゆる面に浸透しています。科学、芸術、文学、演劇、経済的福祉を求めての努力等、事実、現存の事物の無秩序に対する個人的社会的反対は、アナキズム精神の光によって照射されている。それは個人の主権の哲学であり、社会調和の理論です。アナキズムは、世界を再建する偉大なうねりの生きた真理であり、夜明けの先導者になるでしょう。

少数者対多数者

現代の傾向を要約すれば、わたしは量だと云いたい。多数者、大衆の精神が至るところを占領して、質を破壊している。わたし達の全生活―生産、政治、それに教育―は量、数量によりかかっている。以前は自分の仕事の完全無欠と質に誇りをもっていた労働者は頭腦のない、競争にならない自動人形にとつて代られ、これが自分等にとつて無価値でその他の人びとにとつても全般に有害で巨大な量の品物を作りだしている。こうして、人生の快適さと平和を加える代りに只ただ人間の重荷を増しているのである。

政治において、ただ量だけが数えられる。しかもその増加に比例して、原理、理想、正義、高潔さは定足数の整列によって完全に駄目にされている。主権の争いにおいて、種々の政党はお互いに術策、欺瞞、巧妙、暗い陰謀を使っているが、それは成功した者が勝利者として多数者から賞讃されるのを確信しているのである。それこそ成功が唯一の神だ。何を代償にしても、どんな酷い代償を性格に及ぼしてもかまわない。この悲しい事実を証明する証拠を探がすのに手間はかかりません。

以前は腐敗がこれ程ではなかった。わたし達の政府の完全な墮落は徹底的に露呈しました。これらで米国民は長年批判の外に在って、諸制度の大黒柱とか、民衆の権利と自由の真の擁護者とか、呼ばれてきた政治団体のユダ的性格に直面したことはなかったのです。

けれど政党の犯罪が盲人にも見える程燃えさかってくると、その手先を駆りだすのが必要になり主権を確保しました。こうして犠牲者は、欺かれ裏切られ何百回となく凌辱されながら抵抗もせず勝利者に肩入れするので。当惑しながらも僅かな人びとは、どうして多数者が米国の自由の伝統を破るのかと訊ねるでしょう。その判断力、その理性の力は何処に行つたのでしょうか？しかし当然です。多数者は理性を働かせず判断をもつていないのですから。独創と道徳的勇氣が全く欠けた多数者は、常にその運命を他人の手に委ねます。責任に立ちむかうことができないで、破滅にまでその指導者に従うのです。ストックマン博士が云つたのは正しかった。「われわれの中で真理と正義の最も危険な敵は結合した多数者、呪われた結合した多数者である。」野心や指導力はないのですが、この結合した大衆は革新程嫌いなものではありません。いつだって新しい真理の先駆者である革新家に、反対し宣告して追い回すのである。

わたし達の時代に、政治家や社会主義者を含めて、よく繰返されるスローガンはわたし達の時代が個人主義の、少数者の時代だということです。表面的なものの下流を探ろうとしない人びとだけがこの考えを歓迎するようです。世界の富は僅かな人びとが蓄積しているのではないのでしょうか？かれらが主人で条件の絶対的王様達ではないのでしょうか？しかし、かれらの成功は個人主義に依るのではなく、情性や、強情や大衆の隷属に依るのです。大衆は支配され、導びかれ、強制されるのを望むのです。個人主義について言えば、人間の歴史のどの時代でも表現の機会に恵まれず、またそれが正常で健全な仕方であると自己肯定する機会はありませんでした。

正直な意図をもつた個人的な教育家、独自の考えをもつた芸術家とか作家、独立独歩の科学者とか探険家、社会変革について妥協を許さない先駆者達は、時代と共に腐って行く学問や才能をもつた人

びとによって壁に打ちつけられています。

フェラー（フランシスコ・フェラー、スペインの教育家で、「近代学校の起源と原理」の著作がある。訳註）型の教育家はどこでも存在が許されず、離乳食の栄養士達、エリオットやバトラ教授達が実体のない自動人形の時代に成功する永続功労者なのです。文芸や演劇の世界でもハンフレイ・ワードやクリティ・フィッチャは大衆のアイドルですが、エマーソンやソーロー、ホイットマン、さてはイブセン、ハブットマン、バトラ・イエッツ、ステファン・フィリップのような人びとの美しさや才能を知つたり評価する人はまれなのです。かれらは多数者の地平遙かで孤独な星のような存在です。

出版者、劇場支配人、批評家達は創造的芸術の中の個有な質は問題にしないで、よく売れるか、民衆の舌に合うかどうかを求めるのではないのでしょうか？不幸なことにこの舌は湿った大地のようです。心の咀嚼を必要としないものならなんでも味わいます。その結果、平凡で普通なありきたりが主要な文学的作品を代表しています。

芸術の中でもわたし達は、同じ悲しい事実に向面しているのを言う必要があるのでしょうか？わたし達の公園や街路を見るだけで、あの芸術的作品の嫌や粗野さが解ります。確かにそれは多数者の趣味が芸術にさような暴行を許しているのです。観念に過ちを犯し、実作で野暮な、米国の都市を荒らしている彫像は、ミケランジェロに対するトーテムのような真の芸術に対応する関係をもっています。けれどそれが成功している唯一の芸術なのです。真の芸術的天才は受け入れられている考え方に迎合せず、独創性を發揮して生に忠実であろうとしますから、目だたない酷い存在に追いたてられるのです。彼の作品も何時かは愚衆の一時的流行の対象になるでしょう。しかしそれまでには彼の心臓の血は枯渇してしまうのです。それまでには彼の道をたどる人もなくなり、理想のない、ウィジョン

のない愚衆の一群が巨匠の遺産に死を宣告するのです。

現今の芸術家は、プロメテウスのように、経済的必要性の岩にくくりつけられているから、創造できないのだとよく言われます。しかしこれはすべての時代における、芸術の真実なのです。ミケランジェロが、保護者に依存していたのは、現今の彫刻家や画家と同じですが、違うのは当時の芸術の鑑定家達が、狂気じみた大衆からかけ離れていたことです。彼等は巨匠の宮居に詣でるのを名譽と感じていました。

わたし達の時代の芸術の保護者達は、只一つの基準、一つの価値しか知りません。それがドルなのです。どんな偉大な作品でもかまやしない、それに要したドルの量だけなのです。こうしてミラボーの劇、*Les Affaires sont les Affaires* 中の資産家が色のばやけた配合を指して言います。「ごらん、なんて立派だ。五万フランしたんだからな」わたし達の成金も全くこれと同じです。彼等の立派な芸術の掘出し物に支払った法外な数字は、彼等の趣味の貧弱さを購うに違いありません。

社会において最も許し難い罪は思想の独立です。これが民主主義を象徴にする国で、非常に明白なのは多数者の恐ろしい強大な力を意味しています。

ウエンデル・フライリップが五〇年前に言いました。「絶対的な民主的平等のわが国で、与論は絶大であるだけでなく至る所にある。この暴虐から遁れたり、その手の届かない隠れ家はないのだから、その結果は、あなたが古いギリシアの、松明を持って百人の人びとの間を求めても、自分の野心、社会生活、事業において、自分の周囲の人びとの良い評判や投票によって、利益を受けたり失なったりしたと思ひこんだ米国人を必ず一人はみつけるでしょう。その結果、個性のある大衆の代りに、各自が自分の信念を大胆に消し去り、国民として他の諸国民に比べると、われわれは憶病な大衆なのであ

る。他のどの民衆よりもわれわれはお互いに恐れているのだ。」 確しかにわれわれは、ウエンデル・フライリップが遭遇した状態からさほど遠くは前進していない。

今日、以前もそうでしたが、与論は絶大な暴君です。今日、以前もそうでしたが、多数者は臆病者の大衆を代表し、自分の魂や心根の貧しさを映しだす者を喜んで受入れます。これがルーズベルトのような男の、前例のない成上りを説明するのです。彼は群集心理の最悪の要素を体現しています。政治家として、彼は多数者が理想とか誠実など少しもかまわないのを知っています。熱望するのは誇示です。それが大の展示会だろうと賞金稼ぎだろうとへ黒んぼのリンチ、つまらぬ犯罪者の検挙、女性遺産相続人の結婚、前大統領の曲技だろうと意に介しません。心理的ゆがみが酷ければ酷い程、大衆の喜びと歓迎は大きいのです。こうして理想は貧しく、魂は卑しいルーズベルトが時の人になりつづけるのです。

他方ではかような政治的小人共のはるか上に、そそり立つた趣味の優れた人、知性人、才能の人はいくじなしとして囃したてられ沈黙させられています。わたし達の時代が個人主義の時代だと主張するのは不条理です。わたし達の時代は単に歴史上の現象―大衆からではなく、少数者から発生する進歩、啓蒙、科学、宗教や政治経済の自由に対するあらゆる努力の一層強烈な繰返しに過ぎないので

す。今日、以前と同じく少数者は誤解され、追われ、投獄され、拷問を受け殺されています。ナザレの煽動者（キリストのこと―訳註）が解説した友愛の原理は、それが少数者の導きの灯である限り、人生や真理、正義の芽を保有しているのです。多数者がそれを押さえた瞬間、その偉大な原理は、苦しみと不幸をふりまく流血と放火の合言葉や前兆になる。ローマの絶対権にヘス、カルヴィン、ルーテルのような巨人が指導した攻撃は、夜の真闇の中で曙でした。しかし、ルーテルやカルヴ

インが政策家に変貌すると忽ち小人数の君主、貴族、愚衆精神に迎合し始め、宗教改革の偉大な可能性を危険にしました。彼等は成功して多数者になった。けれどこの多数者は思想と理性の迫害において、カトリックの悪魔と同じく残酷で血に飢えているのを証明したのです。その言明に頭を下げない異教徒と少数者にはわざわざいがあれ、非常な熱心さ、辛抱、それに犠牲を払った後で、人間の心はようやく宗教の亡霊から通れてました。少数者は新しい征服を求めに出かけ、多数者は、時代によって嘘偽の生長した真理によって、ハンディキャップをつけられ、はるか後方であえいでいます。

政治的には人類は王や暴君の権力に対して、一寸刻みに闘ったジョン・ポール、ワット・タイラー、ウイリアム・テル程ではないとしても、末だに絶対的隷属にあります。けれど個性のある先駆者達にとつてフランス革命のあの巨大なうねりによつてその根底が揺り動かされなかつた訳ではありません。だからカミュ・デスムリンの雄弁と烈火はバステイユの拷問、虐待、恐怖が象徴する地上を焼き払うジエリコの到来を告げるラッパのようでした。

いつでも、どの時期においても少数者は偉大な理想、自由解放の努力の旗手でした。大衆は動きのとれない鉛の重荷のためそうはなりません。この真理はロシアにおいて、他のどこよりも大きい力で確認されました。数えきれない生命が既に血に飢えた制度によつて費いやされたが、それでも王座に坐つた悪魔は満足しないのです。鉄のくびきの下で、深く繊細な情念が苦しむ時、どうして理想、文化、文学というようなものが可能でしょうか？多数者、結合した不動の眠りこけた大衆であるロシア農民は、犠牲と云い難い不幸と闘争の一世紀後でも末だに「白い手の人びと」（知識人）をくびつたロープが幸運をもたらすと信じているのです。

自由についての米国人の闘争で、多数者は躓きの石でしかありませんでした。今日まで、ジエフア

ソン、パートリック・ヘンリー、トーマス・ペインの理想はそれぞれの後継者達によつて否定され売却されました。大衆はそれらが必要としないのです。リンカーンについてその偉大さと勇気が尊敬されているが、当時の全景を形づくつた人びとのそれは忘れられてしまった。黒人達の本当の擁護聖者はボストンにおける一握りの闘争者達、ロイド・ギャリソン、ウエンデル・フィリップ、ソーロー、マーガレット・フーラー、テオードル・パークであった、その人びとの偉大な勇氣と不屈が、あの憂うつな巨人、ジョン・ブラウンに最後を飾りました。リンカーンとその追隨者達は（奴隷の）廃止が実際に公布され、そうしたものとして皆から認められてきたのでした。

ほぼ五〇年前、流星のような思想が世界的地平線に出現し、その一つの思想は至る処の暴君達の心に恐怖をまきちらす程、すみずみにまで行き渡り、革命的ですべてをなめ尽す程のものでした。他方、その思想は数百万の人びとにとつて歓喜の前触れであり希望を湧きたたせました。開拓者達は前途の困難を知り、反対、迫害、遭遇する難儀を知っていましたが、誇らかに恐れることなく、かれらは前へ前へと歩を進めました。現在ではこの思想は流行のスローガンになっています。今日では誰でも社会主義者です。金持もその貧乏な犠牲者も、法の権威の保持者もその不幸な被告と同じく、また自由思想家も宗教上の嘘偽の迫害者と同じく、また流行の貴婦人もシャツとブラウスだけの娘と同じく社会主義者です。どうしてそうじゃないのだろうか？今では五〇年前の真理が嘘になった。今ではその若々しい想像力が片輪になって、活力を奪われ、その力とその革命の理想が奪われてしまったのだ。それならどうしてそうあつてはならないだろうか？今では一個の美しいウイジョンではなく、多数者の意志に依存した「実際の実行できる計画」になったのです。それならどうしてそうあつてはならないだろうか？政治の奸智はいつでも大衆を賞揚して歌う。可愛そうな多数者、凌辱され侮辱

される巨大な多数者がもしわたし達に付添えばいいのだが……。

以前からこの連禱を聞いてない人があるだろうか？政治家達の変りばえのない繰返しを知らない人がいるだろうか？血を流し盗まれ搾取されるのが大衆なのは票を釣る人と同じくわたしも知っています。しかし、わたしは主張したい。それは一握りの寄生虫だけではなく、大衆自身にこの恐ろしい事情の責任があるのだ。大衆こそ主人に依りかかり、鞭を愛好し、資本主義の権威とか何か他の崩れる制度の聖域に反対の声があがると、最初に「磔りつけよ！」と叫ぶのです。大衆が喜んで兵士や警官や看守、死刑執行者にならなかつたら、その権威や私有財産がどれだけ存続し得たか疑問です。社会主義の煽動家達もこのことはわたしと同様よく知っていますが、かれらは多数者の美德の神話を支持しています。というのはかれらの人生計画は権力の永続を意味するからです。かれらは頭数なしで何が得られるでしょう。そうです。権威、強制、依存等は大衆によりかかって居り、決して自由、個人の自由な発展、自由社会の誕生ではないのです。

わたしは圧迫されたと感じるから、この地上に失望しているのだとか、民衆の生活がいつわりで、恐怖と不名誉をひきつづけているのを知らないため、善に対する創造的力としての多数者を非難しているではありません。決してそうじゃない！わたしがよく知っているのは結合した大衆としての多数者は、決して正義とか平等を代表するものではないということです。それは人間の声を圧迫し、人間の精神を抑圧し、人間の体を鎖でつなぎとめるのです。大衆としてのその目標は常に人生を均一化し、灰色で退屈な砂漠にしてしまう。大衆として、それは常に個性の自由な活動と独自性のサツリク者である。だからわたしはエマーソンの言葉を信じています。

「大衆はその要求と影響において、粗野で片輪で有害である。おだてあげるのではなく、教化が必

要だ。わたしは彼等に譲歩しようとは思わない。それどころか孔をあけ、分割し、打碎いて彼等から個人を引きだそうと思う。大衆！大衆は災厄だ。わたしは大衆を少しも望まない。それどころか公正な男達だけ、愛らしく親切で教養のある女達だけが望みだ。」

別な言葉で云えば、社会や経済の生きいきと生命のあふれた真理は、熱心で勇気があり、妥協を許さない知的少数者の決意によって実現するものであり、決して大衆によるのではないのです。

女性解放の悲劇

わたしは次ぎのことを承認する。人類の中にある種々のグループ間の基本的な差異を処理する、すべての政治的経済的理論にかかわりなく、女性の権利と男性の権利の間にある人工的境界線にかかわりなく、それらの区分が合致して、一つの完全な全体に成長する点があるものとわたしは信じている。これによって平和条約を提案するではありません。わたし達の今日の公的生活の全部を押しえている一般的社会の反目は、反対や矛盾した利害によってもたらされているのであって、それは経済的正義の原則に基づいた、わたし達の社会生活が承認されると粉々に砕け、一つの現実となるのです。

両性や個人の間の平和とか調和は、人間の表面的な平等に必ずしも依るものではなく、また個人的傾向や特異性を除去するよう求めるものではありません。わたし達が現在直面している課題は、近い将来に解決されるでしょうが、どのように個人であって、しかも他者と一つになり、すべての人と深く共感して、しかも自分の特長のある性格を保持するかということです。わたしにはこれこそ大衆と個人が、真の民主主義者と真の個体が、男と女が反目や対立なく合致する基礎になるものと思います。合言葉は、「お互いに許せ」ではなく、むしろ「お互いに理解しよう」というのです。よく引用されるスタール夫人の言葉に「すべてを理解するのがすべてを許すことである」というのがありますが、わたしには別に何も訴えません。これは告解の臭みがあります。仲間を許すというのはパリサイ的な優

越の観念です。先きの承認は、女性の解放と同性全体に及ぼすその影響についての、わたしの観念の基本的な面を部分的に表わしたものです。

解放は女性が本当の意味で人間らしくなるのを可能にしなければなりません。彼女の中にある肯定と活動を求めてやまないすべてのものが、その完全な表現に達しなければなりません。すべて人工的な障害は打ち破られ、幾世紀にも亘る従属と隷属を払いのけた、より大きな自由への道を開かなければならないのです。

これが女性解放運動の本来の目的でした。けれどこれまでに達成した成果は、女性を孤立化させ、女性にとって非常に大切な幸福の源泉を奪いました。ただ外面的な解放は、現代の女性を人工的な生きものにし、風変りな樹木や灌木、ピラミット、車、花輪などを配したフランスの盆景を想いださせます。それには、女性自身の本来の性質の表現によって到達される筈の形式を除いては、すべてが備わっているのです。さような人工的に飼育された女性植物は、特にいわゆるわたし達の知的分野で数多く認められます。

女性に自由と平等を！当時、高貴で勇敢な人びとによって、初めてかような言葉が称えられた際の希望と熱望はどんなであったでしょう。太陽がその光りと輝きを伴って、新世界に昇ったのです。この世界で女性が直接自分の運命に委ねられるということ。これは確しかに、偏見と無知の世界にすべてを賭けた開拓者である男女の巨大な一群の、大きな熱情と勇氣、忍耐と休まない努力に価する目標でした。

わたしの希望もまたその目標に向っていますが、現在理解され実際に行なわれている女性の解放は、その偉大な目標に到達できなかつたと思います。現に女性は、本当に自由でありたいと熱望するなら、

解放から自分を解放する必要に遭遇しているのです。これは矛盾してするように聞えますが全く真実です。

女性は解放によって何を待たてようか？ある国々では平等の参政権でした。これは多くの善意の擁護者が、予想したようにわたし達の政治生活を清潔にしたでしょうか？違います。ついでに言えば、素朴で健全な批判力をもつ人なら、学校の寄宿舎で議論するように政治の腐敗を語るのはやめるべき時なのです。政治の腐敗は、道徳とか道徳のゆるみとか色々な政治的人間とは何のかかわりもないのです。その原因は、全く物質的なものです。政治は事業と産業界の反映であって、その合言葉は「取る方が与えるよりずっと幸福」「安く買って高く売れ」「片方の汚れた手で片方を洗う」とか言うのである。女性が投票権を持つようになっても、政治を清潔にする希望はありません。

解放は女性に男性との経済の平等をもたらしました。すなわち女性が自分の職業や商売を選べるのです。しかし、彼女の過去や現在の肉体的訓練は、男性と競争するのに必要な力が与えられていません。それどころか女性は、市場価値を手に入れるためには活力や生命力のすべてを使い果し、神経をすりへらさなければならぬのです。しかも成功した人はほとんどありません。なぜなら、女教師、医者、法律家、建築家、技術者などは、男性の同僚ほど信頼を受けていませんし、等しい給料も貰っていないのです。だからその魅力的な平等を獲得しようとするひとは、自分達の肉体的精神的福祉を代償にしています。働く少女や女性大衆にとって、家庭の狭さや自由のなさが、工場、酷使する店、デパート、または事業所などの狭さや自由のなさに代ったからといって、どれだけの独立が獲得されたといえるでしょうか？その上、多くの女性には一日のつらい労働のあとで、冷めたい、嫌で乱雑で余計な「楽しいわが家」を世話する負担がかかっています。何んと素晴らしい独立でしょう！だから

何百人もの少女達がミシンやタイプライター、カウンターを前にして、彼女達の「独立」に倦み飽いて、結婚の申込みがあると喜んで受入れるのは、少しも不思議ではないのです。彼女達は中産階級の娘達としてすぐ結婚するが、それはさようにして、両親の主権のくびきを遁れようと望んでいる訳です。ただ単に生存するだけのものを稼ぐ所謂独立は、それ程魅力的でもなければ、理想でもなく、その為に女性にすべてを犠牲にせよと期待することはできません。わたし達が高く評価した独立は、結局、女性の本性、愛の本能、母性本能を駄目にし、硬化させるゆるやかな過程でしかないのです。それでも働く女性の地位は文化的な職業の人生街道―教師、医者、法律家、技師等―気位が高く風采よくつくろって、その実内面生活が空虚で死んでいる、見たところはかに幸運そうな姉妹にくらべずと自然で人間的です。

女性の独立と解放についての現在の考え方の狭さ、自分と社会的に平等でない男性に対する愛の不安、恋愛が自分の自由と独立を奪わないかという恐れ、母性の愛と喜びが、自分の職業のさまたげになるのではないかと恐怖―これらのすべてが一緒になって解放された女性を、処女であるように強いるのですが、彼女にとって人生は、その大きな浄化作用をもった悲しみや深く恍惚的な歓喜が、魂に触れたり魂を捕えることなく、ただ過ぎ去るのです。

その擁護者や解説者の大多数が理解しているような解放は、自由な本當の女性、恋人、母親の深い感情の内に含まれた限らない愛や魅惑を認める領域としては狭すぎます。

自活したり経済的に自由な女性の悲劇は、経験が多すぎるとはなく、少な過ぎる点にあります。確かに彼女は以前の世代の女性に比べ、世の中や人間の性質についての知識では優れていますが、けれど丁度そのため、彼女は人生の本質が欠けているのに深く悩むのです。何故ならそれこそ人間が、

ただ職業的な機械人形になったからなのです。

来たるべき事態は倫理の領域で、男性の問題にならない優越きの時代の、多くの禍根が未だに残っており、しかも未だにそれが有益だと認める人びとによって、予見されてきました。だがもっと重要なのは、解放された人びとの相当数がそれがなくてはやっていけないことです。現存の制度を破壊するとか、何かもつと進歩した、もつと完全なもので更新するのを目的にしたような運動では、理論でこそ最もラジカルな考えを示めず人びとが、その日常生活では、普通の俗物のように敵対者の尊敬や良い評判を酷く気にするのです。例えば、社会主義者やアナキスト達、財産は盗みであるという考えを示す人びとでさえ、誰かが半ダースのピンぐらいの価値のものを借りっぱなしにでもしようものなら怒りだします。

同じような俗物が女性解放運動に認められます。黄色新聞の記者や甘い読物作者は、解放された女性を善良な市民やその退屈しているつれあいの髪が逆立つように脚色しました。女性の権利運動の参加者は、ジョージ・ジュ・サンドのように道徳を全然考慮しないように描かれました。彼女にとって神聖なものは何もありません。彼女は男と女の間の理想の關係に尊敬をもっていませんでした。つづめて言えば、解放は欲望と罪の、社会や宗教、道徳を考慮しない放縱な生活だけを示すものでした。女性の権利の擁護者達は、さような誤報に憤激して、ユーモアがないため、描かれている程悪いものではないことを証明しようと夢中ですが、実際はその反対が本当なのです。勿論、女性が男性の奴隷である限り、善良でも純潔でもあり得なかつたのですが、今は自由で独立しているのですから、どれ程良くなり、また彼女の影響が、社会のすべての制度に及ぼした浄化効果を証明すべきでしょう。事実、女性の権利運動は、沢山な古いかせを打破しましたが、新しいかせのことも忘れていません。本当の解

放の偉大な運動は、自由を見据えることのできる女性の大きな集団に出逢ってはいません。彼女達の狭いピュリタン風のウィジョンは、男性を女性の情緒生活の中の邪魔者、あいまい分子として排撃しました。男性は多分、子供の父親としての外はどの点からも許容されなかつたのです。なぜなら父親がなくては子供は全くのところ生命を受けませんから……。でも幸いなことに、最も厳格なピュリタンでも、母親になりたいという女性固有の熱望を押し殺す程、強くはならないでしょう。けれど女性の自由は、男性の自由と緊密に結びあわされて居り、わたしの呼ぶ所謂解放された女性の多くは、自由の中で生まれた子供は、男と同じく女の、つまり各人の子供に対する愛情と献身を必要としているのを見落しているように思われます。不幸なことに、この視野の狭い人間關係の考え方が、現代の男性と女性の生活に大きな悲劇をもたらしているのです。

一五年程前、優れたノールウエの女性、ローラ・マルホルムのペンによって、「女性—性格研究」という著作が現われました。彼女は現在の女性の解放についての考への空しさと狭さ、および女性の内面生活に及ぼすその悲劇的な効果に注意を呼び起した最初のひとりです。その著作の中でローラ・マルホルムは国際的に有名な幾人かの才能ある女性の運命を語っています。天才エレオノーラ・デュース、数学者で作家であつたセーニヤ・コバレフスカヤ、芸術家で詩人の素質があつたマリー・バシールキルツエフ、この人は若くして亡くなりました。優れた精神力をもつたこれらの女性達の生活の叙述を通じて、完全でまろやかな完成と美しい生活へのやみがたい熱望、それを欠いたための休らぎのない淋しさが、全編に明らかかな形跡を残しています。これらの優れた心理描写を通して、女性の精神の発達が高度になればなるほど、彼女にとって、自分の中に性だけでなく、人間として、友人として、同志として強烈な個性を認め、彼女の性格のどんなささいな傾向も見落さない気心の合つた相手に出

逢う可能性が、少なくなるのを認めない訳には行きません。

女性に対して庇護するという奇妙な優越感と自己満足をしている平均的男性は、ローラ・マルホルムが「性格研究」で書いているように、女性にとってやりきれないものです。同じく彼女にとってやりきれないのは、女性の中に精神と才能の外は何もみず、女の本性を呼びさますことのできぬ男です。豊かな知性と美しい魂は、一般に奥ゆかしく、美しい人間の必要な属性と考えられています。現代の女性の場合、こうした属性は、彼女の存在を完全に肯定するさまたげになるだけです。一〇〇年以前から聖書に基づいた結婚の古い形式「死ぬまで離れざるべし」は、男性の女性の上には及ばず主権、彼の思いのままや命令に服する彼女の完全な服従、彼の名前と養いに全く依存させることを現わした制度として告発されてきました。時代はめぐって、古い婚姻関係は、女性が男性の召使いや子供を生む者としてあることを決定的に証明しました。けれど多くの解放された女性はそうした欠陥はあっても未婚の狭少さと引代えに、結婚を選ぶのが認められます。それは女性の本性を押しえつけ、つなぎとめる道徳的社会的偏見が、狭少で堪えがたいからである。

多くの進歩した女性の側のかような無定見は、解放の意味を本当に理解していない事実の中に説明が見出されます。彼女達は必要なのは、外的な横暴からの独立だと考えました。けれど内部の横暴は——はるかに生やその成長にとって害がある——倫理や社会のしきたりは、手をつけずに放置したのです。だから復讐されるのです。それらはわたし達のおばあさんの頭や心でもって、女性解放の最も活発な擁護者達の頭や心を上手に取扱うのです。

内部の暴君とは、世論の形や母、兄弟、父、伯母、親類の人が言ったと言わなかったとか、グランディ夫人や雇主のコムストック氏、教育省が何んとか言ったというようなものです。こうしたお忙がしい人びと、道徳の探偵達、人間精神の看守達は何を言うのでしょうか？女性がさような言葉を拒絶し、自分の地面にしっかりと立って、制限のない自分の自由を主張し、自分の本性の声に耳をかたむけ、それが生活の最大の宝や男性に対する愛、彼女の最高の輝やかしい特権、子供を産む権利などを呼びだすのを学ばない限り、自分は解放された女性だと呼ぶことはできません。解放された女性のうち、愛の呼び声を使命として、自分の胸を晴れやかに叩き人に聞かれ、満足させられることを大っぴらに求めた勇敢なひとほど程いるでしょう。

フランスの作家、ジャン・ライブラがその小説の一卷「新女性」の中で、理想の美しい解放された女性を描きました。その理想は若い女性医師に体现されています。彼女は幼児の育て方を非常に賢明に語ります。親切で不幸な母親には無料で薬を施すのです。彼女が未来の衛生状態について知合いの青年と会話を交し、どのようにはい菌や細菌は石の壁と床を使用して、またほろやかければなしの衣類を駆逐して除去されるかを語るのです。勿論、彼女は質素で実用的な大体が黒の衣服をまとうています。青年は最初逢った時は、この解放された友人の英知に恐れをなしますが、やがて彼女を理解するようになり、ある晴れた日に、彼女を愛しているのを認めます。かれらは若いのです。彼女は親切で美しく、いつもとりすました容姿をしています。それを汚れない純白の襟とそで口でやわらげています。読者は彼が自分の愛を語るだろうと期待しますが、彼はロマンチックな不条理は犯かしません。詩と愛の熱望はこの女性の清潔な美の前にして顔を赤らめるのです。彼は自分の本性の声を黙らせ、正気を保ちます。彼女もまたいつも正しく、いつも理性的でいつも立派に振舞うのです。わたしはもしこの人たちが一緒になったら、青年の方が凍死するのではないかと案じます。告白すれば、この美しい新女性は、彼女が夢みている石の壁や床と同じく、冷やかであるとしか認められません。

わたしなら、むしろローマン派時代の愛の歌、ドン・ジュアン、マダム・ヴェイナスの方が、それに月夜にはしごとロープで駆け落ちして、その背後を父親の呪いの言葉、母親の嘆き、隣人の道徳的な批難などの追っかけてくる方が、しゃく子定規で計った正確さや礼儀正しさよりずっとよいと思います。もし愛が無制限なギブアンドテイクの仕方であるのを知らなければ、それは愛ではなく、差引き勘定を忘れない計算にしか過ぎません。

今日の解放の大きな欠陥は、その人工的な硬直と偏狭な体面にあつて、それが女性の魂の中に、生の泉から飲むことを許さない空虚を作りだしているのです。わたしは先に、自分の子供の幸福や、愛する者の快適さをいつも心懸けている旧い型の母親や女性と、この種の新女性の間には、後者と普通の解放された女性の仲間達の間よりずっと深い関係があるのを言及しました。純粹で単純な解放の弟子達は、わたしを異端として火あぶりの柱にくくりつけるのが適當と言うかも知れません。その人びとの盲目的な熱情は、わたしが新旧を比較して、現代の大学や研究室や色々な事業所を一杯にしている解放された職業人である女性達より、非常に沢山なわたし達のおばあさんの方が、ずっと情があつて、ユーモアや機智に富み、はるかに多くの自然さと親切、それに単純さをもっていたことを証明するだけなのに、それを認めないのです。これは昔に帰りたいとか、女性を古い領域、台所と育児に押しつけようというのではありません。

救いはいつそう明かる輝かしい未来へ、力強く前進するところにあります。わたし達は古い伝統と習慣からさまたげられない成長が必要です。女性解放運動は、これ迄その方面での第一歩でした。だから力を結集して別の一步を踏みだすよう望まれるのです。選挙権とか等しい市民権は良い要求ですが、本当の解放は投票所や裁判所で始まるのではありません。女性の魂の中で始まるのです。

歴史が教えているのは、被抑圧階級は自己の努力で、主人から真の自由を獲得しているということです。女性はこの教訓、彼女の自由は、自分の力でその自由を達成するだけ実現するのだということに学ぶ必要があります。ですから女性にとっては、自分の内部の更生、偏見、伝統、習慣の重みを切り離すことから始めるのが一層重要です。人生のあらゆる仕事において、平等の権利を要求するのは正しく立派です。けれど兎角、最も重要な権利は愛し愛される権利です。事実、もし部分的な解放が女性の完全で真の解放になるなら、愛されるとか、恋人になつたり母親になるというのは、奴隷とか従属するものと同義語になり奇矯な考えとして排斥されるでしょう。しかし排斥すべきなのは、性の二元性の不合理な考え方、つまり男と女が二つの相反する世界を現わすという考えの方なのです。

つまらぬものは切離し、広く豊かに結合しましょう。わたし達はおうようで立派になりました。けれどわたし達の遭遇するのがつまらぬものの集積だからと言って、肝心なものを見過ぎないようにしましょう。両性の関係の本当の観念は、征服と被征服を許さないので。それは只一つのこと、自分を限りなく与え尽すのが、自分を一層豊かに深く良くするのだということを知っているのです。それだけが空虚を充し、女性解放の悲劇を歎びに、無限の歎びに変化させます。